

平成 28 年度（公財）日本体操協会 政策方針

（スローガン）

夢の実現

（はじめに）

1960 年ローマ・オリンピックで、男子体操は団体・金メダルを獲得しました。以来、日本の体操は「体操ニッポン」の称号を受け、輝かしい「栄光の道」を歩み続けるとともに、「国民の夢」を背負う競技へと位置付けました。しかし、1996 年アトランタ、2000 年シドニー・オリンピックと 2 大会連続で「国民の夢」であるメダル獲得という使命を果たせないと、「体操ニッポンに再び陽は登らず」とまで誹謗されたのです。

その後、日本体操協会は「過去の栄光」から脱却し、様々な改革に取り組みました。その結果、2004 年アテネ・オリンピックで「栄光への架け橋」という名言とともに、男子体操団体が金メダルを獲得し「体操ニッポン」の復活を果たしたかのように見えたが、その後は中国に後塵を浴びせられ続け、真の復活劇を待ち望む 11 年間でしたが、ようやく昨年のグラスゴー世界選手権で 37 年振りに、再び団体王座奪還を果たしました。

11 年間もがき続けた「体操ニッポン」でしたが、ふと気づくと、男子体操に追いつくと、昨年の各世界選手権では新体操が 40 年振りに銅メダルを獲得し、女子体操も団体第 5 位に入賞、トランポリンも男子が 4 位に入賞するという、体操の全ての種目に於いてオリンピック出場権を獲得するという世界でも数少ない「体操王国」へ成長を遂げていたのです。今、私たちは確実に夢に近づいたといえるのではないのでしょうか。今こそ、「夢を実現する」その時なのです。

（リオデジャネイロ・オリンピックでの目標）

男子体操においては、2004 年アテネ・オリンピックで団体金メダルを獲得した以降、団体王座を中国に譲り続けています。昨年のグラスゴー世界選手権で 11 年振りに王座を取り返しました。リオデジャネイロ・オリンピックでの最重点目標は「団体金メダル」といたします。内村航平選手の個人総合・金メダルに加え、種目別でも 2 つの金メダル、その他にもメダルを 3 つ、合計で 4 つの金メダルを含む 7 つのメダル獲得という高い目標をもってリオデジャネイロ・オリンピックに向かいます。

女子体操においては、2008 年の北京オリンピックから常時入賞国としての定位置を確保しています。昨年のグラスゴー世界選手権においても団体決勝進出は困難との前予想を覆し、みごとに第 5 位入賞を果たしました。リオデジャネイロ・オリンピックでは、団体で銅メダル獲得、種目別でメダル獲得、個人総合で 8 位入賞を目標といたします。

新体操においては、昨年のシュツツツガルド世界選手権では 40 年振りに団体種目別で銅メダルを獲得したことから団体ではメダル獲得の実力は備わっていることが証明されました。リオデジャネイロ・オリンピックでは団体でのメダル獲得を最重点目標とし、加えて 12 年振りにオリンピックに参加する個人総合においても 8 位入賞を目標といたします。

トランポリンにおいては、2000年シドニー・オリンピックからオリンピックの正式参加種目となって以来、届きそうで届かなかった男子のメダル獲得を目標といたします。また、体操種目の中で唯一リオデジャネイロ・オリンピックの出場権利が獲得できていない女子トランポリンにおいては、4月に開催されます「リオデジャネイロ・オリンピック・テストイベント」でオリンピック出場権を獲得し、リオデジャネイロ・オリンピックでは5位入賞を目標とします。

(一般体操)

「2060年問題」、それは日本の高齢者が人口比率で40%を超える年です。日本は世界に先じて超高齢化社会を迎えています。高齢化社会の大きな問題点は社会保障費・医療費の増加です。です。介護に至らない健康寿命を延ばすことが、国としての重要課題となっております。健康寿命を延ばすための三要素は、「運動・社会参加・食事」です。高齢者が手軽に楽しめるスポーツのコミュニティを多く作っていくことが社会のニーズとなってきます。

一般体操は体操を通じて、国民が運動し社会参加できる機会を供給することで、国民の健康寿命を延ばし社会に貢献して参ります。

そのために本協会は、一般体操の「全国の組織化」、「一般体操指導者の育成」、そして「地域体操祭の開催」と体制の整備を進めて参りました。地域に根差した「新しいコミュニティの創造」により「スポーツを通じた地域の活性化」、そして「日本の健全化」に貢献して参ります。

(アクロ体操)

アクロ体操は国内においては普及啓蒙されていませんが、欧州やアメリカでは人気スポーツとして各国で積極的に取組まれています。国際体操連盟ではユースオリンピックの種目にアクロ体操を取り入れるようにIOCに働きかけています。この動きに連動し、昨年のヨーロッパゲームでは体操、新体操、トランポリンと同等の位置付けで競技会が開催されています。これらの世界の動きを察知し、昨年度に「日本スポーツアクロ体操協会」を本協会に統合、本協会に「アクロ委員会」を設置し、アクロ体操の普及啓蒙に積極的に取り組むことと致しました。

昨年は「第9回アクロ体操アジア選手権・中国杭州大会」に参加し、日本チームの女子ジュニアペアが銅メダルを獲得しました。アジア地域では未開発のアクロ体操分野にいち早く進出し、優秀な成績を修め、世界の中でも活躍できるポジションを獲得して参りたいと存じます。

(男子新体操)

本協会は数年前より男子新体操とアクロ体操との融合を推進しています。昨年は「第26

回全日本スポーツアクロ選手権」を男子新体操関係者の参加を得て合同で開催をいたしました。また、様々な機会に男子新体操の指導者とアクロ体操の指導者たちが指導方法についての情報共有に努めています。今後は融合のスピードを早め、全国で頑張っている男子新体操選手たちが世界を目標にできる男子新体操界を創造して参りたいと存じます。

(指導における暴力問題への対策強化)

平成 25 年に他競技での暴力指導が発覚した際に、本協会は他競技団体に先立ち、直ちに「指導における暴力、パワハラ、セクハラ撲滅運動」に取り組み始めました。しかし、変わらず事件は発生し続け、昨年は国内の体操界から 4 名の逮捕者を出してしまいました。日本のトップ選手が世界で活躍し、地域体操界の発展に貢献してくれている一方で、このような選手の努力を無にする行為は許されるものではありません。本協会は地域委員会、そして各都道府県体操協会と一体となって、さらに厳しい姿勢をもって本問題に取り組みます。

本協会は「3 つの基本方針」をもって対策に取り組んでいます。第一に「暴力、パワハラ、セクハラが発生しない地域全体で監視する環境づくり」、第二に「指導における暴力を無くす指導方法の教授」、第三に「永久追放を追加した罰則規定の強化」です。しかし、残念ながら未だに 18 都県協会・連盟からは「暴力、パワハラ、セクハラ」の調査報告提出がないのが現状です。加盟団体にも当事者意識、管理者意識をもつていただくような環境整備を行って参ります。

指導における暴力、パワハラ、セクハラが完全に撲滅されるまで、また撲滅後も、本協会は厳しい姿勢をもって取り組み続けます。「指導における暴力、パワハラ、セクハラは存在するだろう」という今の認識を、「指導における暴力、パワハラ、セクハラは存在しないことがあたりまえ」の体操界をつくって参ります。

(2020 東京オリンピックと地域活性化)

「2020 東京オリンピック」のレガシーは東京だけではありません。全国各地でもレガシーがつくられるのです。オリンピック参加国の「2020 東京オリンピック事前調整合宿」もそのひとつです。

本協会は本年 10 月に東京にて「国際体操連盟・総会」を開催いたします。その際に、世界 140 ヶ国から集まる代表団に対し、「2020 東京オリンピック事前調整合宿地」の誘致を行っていただきます。全世界から集まる体操選手たち、体操ファミリーたちをおもてなし、友好を深め、地域の活性化、レガシーの創造に役立てていただきたいと存じます。

また、2020 東京オリンピック開催の関係から「2019 年茨城国体」よりトランポリンが正式参加種目となることが決定をいたしました。これを機に、トランポリンの地域の組織化と普及啓蒙を一気に加速化しなければなりません。地域におかれましては、過去に縛られることなく、未来に向けて地域の組織化を推進していただきたいと存じます。

(むすび)

男子体操・内村選手は「アテネ・オリンピックの栄光への架け橋を、リオデジャネイロで僕の着地で再現します」と力強く宣言しました。新体操・畠山選手は「メダル獲得という夢は見るのではなく叶えるものです」と言い切りました。

これら選手の夢は、私たちの夢でもあります。私たちは「選手の夢」のため、そして「私たちの夢」のために、選手とともにできることは全てやっていかなければなりません。そういった意味を込めて、今年のスローガンを「夢の実現」といたしたいと存じます。

以上、平成 28 年度（公財）日本体操協会政策方針です。皆さん、一緒に頑張りましょう。